

日中国交正常化40周年記念 北海道フォーラム開催報告 ～市民交流の拡大を目指して～

平成24年6月12日（火）、北海道札幌市の札幌パークホテルにおいて、北海道庁、中国黒竜江省人民政府、当協会が主催する「日中国交正常化40周年記念北海道フォーラム～市民交流の拡大を目指して～」が開催されました。

このフォーラムでは、冒頭、主催者を代表して高橋はるみ北海道知事が挨拶し、引き続き、程永華 駐日本中華人民共和国特命全権大使による基調講演「日中間の協力とアジアにおける役割」が行われました。

そのあと、パネルディスカッションが2つ



の分科会で行われました。第2分科会のテーマは「日中交流とシニア災害ボランティア」。

この分科会は、去る2月9日に福島県いわき市と当協会との共催で、退職者による災害ボランティアをテーマとし、「退職者災害ボランティアシンポジウム」を開催し、日本、中国のボランティア、行政関係者、あるいは住民等が参加して、今後の災害ボランティア活動の展開、ネットワークの構築等について意見交換を行ったところであり、このシンポジウムの成果を踏まえ、シニア災害ボランティアを広く普及定着させていくため、全国7カ所で開催するうちの第1回目として札幌市で開催したものです。

第2分科会の開催にあたり挨拶に立った当協会の廿日岩信次常務理事は、「東日本大震災では、数多くの退職者の方が、ボランティアとして参加をされております。シニアの方の豊富な知識経験を踏まえた活動の在り方に焦点を当てながら今後のボランティア活動の展開、あるいはネットワークの構築などについて意見交換をさせていただくものでございます。是非活発なご議論をいただき有意義な会となるようお願いいたします」と開催に寄せる思いを語りました。

パネルディスカッション

14:00～16:00

●テーマ：むすぶ日中交流とシニア災害ボランティア



近年、日中両国で大規模災害が相次いで発生し、双方でボランティアの在り方が注目される中、両地域での体験の紹介、課題の指摘、今後のボランティア活動の展開やネットワークの構築について意見交換を実施。とりわけ注目されているシニアの役割に焦点を当てながら、今後の災害ボランティアの相互交流について活発なディスカッションが行われました。

なお、概要については、次のとおりです。

①災害ボランティアに求められるもの

・災害ボランティアには、被災者の相談相手となって安心を届け、心の傷を癒し、被災者一人ひとりの生の声を関係機関へ伝えるという役割も求められている。

・被災地への支援は、実際に被災地に行かなくとも自分たちでやれることはいくらで

山田 輝昭
北海道地域防災マスター

紋別市出身。海上自衛隊を退官後、赤十字救急法指導員として救急・防災普及活動に従事。旭川市地区赤十字防災ボランティア会を発足。防災士。消防や市町村等で防災業務を経験してきたシニアが地域の防災活動の中心となる道の「地域防災マスター」に登録し、研修講師(防災、救急、災害支援)を務めるなど地域防災に向けた活動を展開中。

長崎 武巳
奥尻島津波語りべ隊
奥尻町住民課長補佐

奥尻町出身。1993年北海道南西沖地震の際、奥尻町役場福祉課の職員としてボランティアの受入れを担当。奥尻島の防災対策や復興の取組について「語る・見る・学ぶ」体験を島内外に広く伝えるため、今年4月、被災体験や復興に関する専門知識を有する島民による「奥尻島津波語りべ隊」を結成。

時光
(特活) 多文化共生マネージャー
全国協議会 事務局長

中国遼寧省出身。全国市町村国際文化研修所(JIAM)勤務を経て、2012年から現職。新潟県中越沖地震や東日本大震災の災害時多言語支援センターで被災した外国人住民への支援活動に携わる。被災地現場における外国人支援や災害ボランティアの在り方について在住外国人の視点から各方面で紹介。

池田 誠
(財)北海道国際交流センター
事務局長

函館市出身。(株)JTB勤務後、ニュージーランドでグリーンツーリズムを学び、2年間、新得町の農場で暮らす。現在、外務省NGO相談員、ESD-J理事、北海道アフリカネットワーク代表。2011年、JICE 友好交流基金「四川省へのボランティア交流事業」団長として参加。東日本大震災被災地に携わった日本のボランティアとともに、中日友好協会や四川省ボランティアとの意見交換を実施。

橋本登代子
(有)ボイスオブサッポロ
代表取締役

大分県出身。1976年S T V札幌テレビ放送(株)入社。1988年退社。1989年フリー活動に入り、ボイスオブサッポロ設立。北海道内各局の番組に出演の他、シンポジウムのコーディネーター、司会、対談、講演会、話し方教室やマナーセミナーなど幅広く展開。



もあると思う。そういう方々のリーダーシップをとっていくのがシニアに与えられた役割ではないかと思う。

・シニアの方々が今日まで培われてきた経験、知識はたいへん豊富で、それを定年になったからと捨てるのではなく、別な形で活かしていこうという意識をもっていたければ、地域にとってもこれほど強いものはないと思う。

②今抱えている課題の指摘、ネットワークの構築

・阪神・淡路大震災以降、様々な災害ボランティアのネットワークが構築されたが、組織と行政が協力して費用負担をはじめ災害ボランティア活動に参加しやすい体制を整えるということが今後必要である。ボランティアを引き受けるにあたっては、トラブルが起きた際にどう対処するかマニ

ユアルを作っておく必要がある。

・ボランティアに参加するには食料、宿泊、旅費など全部自分で負担しなければならぬ自己完結型でなっているが、これからどんどんネットワークを作っていくためには何らかの支援が必要になってくる。

・東日本大震災のボランティア活動の際に以前ネットワークを構築した地域の仲間からの支援、協力があり、スムーズに活動ができたことから、ボランティア活動におけるネットワークの重要性が裏付けられた。

・「奥尻島津波語りべ隊」は、北海道南西沖地震の際、全国からの支援に対する感謝と震災の教訓を後世に残すという目的で設立されたが、こういう活動もゆくゆくはボランティア活動に繋がっていけばと思う。

・シニアボランティアの方の中には、自らの経験を活かし、中国に渡って日本の震災のことを伝えたり、あるいは防災グッズのつくり方などを中国に伝える活動をしている方もたくさんいる。

③シニアの知識・経験を活かすための方策

・シニアの方には、これまで積み重ねてきた豊富な経験があり、いろいろな活動の主役(防災ボランティア、国際交流、地域の町内会等)になつていただきたいので、退職前から少しずつきっかけづくりを始めていただきたいと思う。

・国際シニアボランティア活動は、災害が

起きたからすぐ飛んで行くという方法もあるが、自分の今の状況でできることをしっかり考え、マスコミから伝わる情報だけでなく、より多くのネットワークから得た情報をとくに的確に判断し、支援するという方法もあるのではないかと思う。

・シニアの経験を活かす具体案として、一つは災害に立ち向かう勇気というものをもつていただきたい。災害というものは恐ろしいものだが、そういう勇気をもつことによって被災に繋がっていく。

もう一つは町内に自主防災組織をつくつていただきたいということをお願いしたい。共に助け合うという向こう三軒両隣の精神は今忘れられてきている。だが、共に助け合うことが必要だ。特に災害時の要援護者に関しても十分に配慮する必要があるのではないかと思う。

・本当に人生のキャリアのある方々にとつては、経験というものが素晴らしい財産になっていると思う。その経験を誰かの中で活かすことによって、また自分も成長していく。総合的に素晴らしい作用が出てくるのではないかと思う。

・行政が、シニアが活躍するシステムをつくるということはとても大事なことでと思う。「北海道地域防災マスター」というのは、その行政のシステムの一つにもなるのではないか。こういうことを北海道はもつともっと提案して私たちを巻きこんでいてほしいと感じた。